



教職支援センター ニュースレター

巻頭言

【4つの気質と教育】

「気質 (Temperament)」という言葉をお聞きになったことがあるでしょうか。「個性」に近い概念で、その発端となる思想は、古代ギリシアの医師ヒポクラテスによってもたらされました。ヒポクラテスは、人間のなかに胆汁や血液など4つの異なる液体の流れがあることに気づき、その流れとの関係によって、人間に4つの気質が備わっていることを示しました。その4つの気質とは、以下の通りです。

- 胆汁質：意思が強く、カッとなりやすい「火」のような性質。
- 多血質：好奇心が強く、あちこち動き回る「風」のような性質。
- 粘液質：おだやかで、動きもゆっくりしている「水」のような性質。
- 憂鬱質：几帳面で、深く考え落ち込みやすい「土」のような性質。



20世紀初頭のドイツで始まった「シュタイナー教育」では、現在でもこうした気質による人間理解を教育に取り入れ、それぞれの子どもの気質に合わせたお話の読み方や、教室での席の配置（あえて同じ気質の子ども同士を近くに座らせる）などに生かしています。（詳しくは、エラー2005『4つの気質と個性のしくみ—シュタイナーの人間観』トランスビュー、をご参照ください。）

シュタイナーは、一人ひとりの子どもが「調和のとれた人間」になることを教育の目的の1つとしていました。よって気質についても、どれか1つだけが際立ちすぎている状態は望ましくなく、4つがバランスよく調和するよう働きかけることとなります。

ただ、その「調和」の状態には、なかなかイメージしづらいところがあります。4つの性質が調和するということは、最終的に、どの特性も抑えられた無個性な人間になってしまうということなのではないでしょうか？

ちょうど先日、テレビを観ていたら、世界的指揮者の西本智実さんが、このことを考える上でヒントになることをお話しされていました。西本さんによると、「作曲家それぞれに、独特のハーモニー感覚がある」のだそうです。音楽に関してまったくの素人である私などは、「ハーモニー」にはいくつか決まったパターンがあって、そのパターンに当てはまるもの以外がすべて、いわゆる「不協和音」となるのだと思っていました。しかし今回、この西本さんの言葉から、「ハーモニー（調和）」のなかにもさらに繊細なニュアンスがあって、そこに、作曲家ごとの様々な違いが現れ出てくるのがうかがえました。

気質の調和にも、同じことが言えるように思います。どれか1つ、2つの気質が過剰に際立つ状態には、いろいろな働きかけを通じてその角を丸くしようとするわけですが、そこに生じてくる「調和」は、その子その子により多様なあり方になるのでしょう。

シュタイナーは、古代においては「教育する」と「癒やす」が同じ1つの言葉だったと言い、現代において、ふたたびそのことを意識した教育を行う必要があると述べています。誰にでも「偏り」はありますが、それがちょっとトゲトゲしいものになったり、周りにつながりにくいものになったりしてしまうとき、それを「癒やし」、「調和」にもたらずという視点によって、教育の、これまであまり目を向けられてこなかった新しい面が見えるようになるのではないのでしょうか。

河野 桃子 (教職支援センター 講師)



教育実習を終えて

繊維学部 応用生物科学科4年

植本 満希

実習期間：5/16～6/3
長野県諏訪二葉高等学校

あっという間の3週間でしたが、先生方の協力のおかげで様々なことに挑戦でき、生徒との信頼関係も築け、充実した時間が過ごせました。

教育実習をさせていただけたことで、自分が高校生だった頃には気づくことができなかった先生方の努力を肌で感じる事ができ、先生方に対してますます尊敬の念が深まりました。自分の知らないところで自分のことを支えてくれている方が大勢いるということのを忘れずに、過ごしていきたいと感じました。

また、学習指導に関しては、同じ説明をするにも「どの言葉で、どの順番で、どんな風に伝えるか」で授業の雰囲気ガラッと変わってしまうということが分かり、言葉が与える影響の大きさを痛感しました。

3週間の中でいろいろなことがありましたが、生徒が授業後や放課後に質問しに来てくれた時が一番嬉しかったかもしれません。質問に来てくれることがこんなに嬉しいものだとは思っていませんでしたので、自分でも驚いています。私の授業を受けて、生物に興味を持ち、もっと深く知ろうとしてくれたのだと思うと、教えて良かったなど心の底から思え、教師のやりがいはいかにこんなところにもあるのだと気づくことができました。

教育実習を経て、自分の将来や価値観について考え直すことができました。このような貴重な経験の機会をくださった母校の先生方や生徒達、様々な場面でサポートして下さった信州大学教職支援センターの先生方や家族には心より感謝しています。

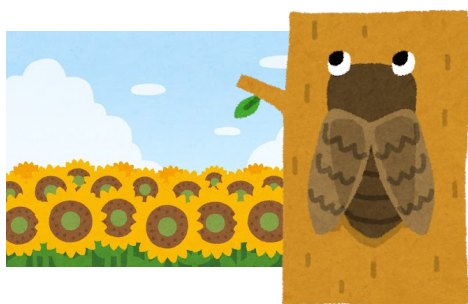


HRを担当したクラスの皆さんとの写真



研究授業の様子

教職支援センター5～7月の動き



○松本市教育委員会訪問・松本市校長会訪問(5/6)、○伊那市教育委員会訪問・南箕輪村教育委員会訪問(5/19)、○生坂村未来塾・山形村未来塾・小川村未来塾開校式(5/21)、○長野県総合教育センターとの連携連絡会(5/23)、○上伊那校長会訪問(5/24)、○教職支援センター拡大打ち合わせ会議(5/26)、○上田・小県校長会訪問(6/2)、○CST養成プログラム実施委員会(6/6)、○教職支援センター運営委員会(6/30)、○筑北村未来塾開校式(7/9)、○長野県教育委員会との連携協議会(7/28)

理科指導法を担当して

農学部非常勤講師

湯澤 正農夫



現在、私は中学校理科免許取得に必要な「指導法」の授業を担当している。当授業は、義務教育教員が理科授業を作り上げていく過程(右図)を辿りながら、「授業づくり」の知識やスキルの獲得を本旨とする。

ところで、学校現場が新教育課程のねらいの一つ「主体的、対話的、深い学び」を展開するためには、指導者自身がこれまでに作り上げてきた指導概念を変えなくてはならない。しかし現実には、「主体的、対話的、深い学び」を標榜しながら、これまでの授業観から脱却できないまま踏襲という形に留まっている教員が多い。

以前から私は、学校で展開される授業とは教育理念(観)や、そこから生み出される授業理論の上に構築されるものだと思ってきた。

したがって、授業づくりの出発点である子どもに対する概念が違う。また授業への柔軟性に欠ける教員が「主体的、対話的、深い学び」を実践しようとしても困難なことは明白である。講義形式の授業経験を積み重ねてきた必然の結果であり、恐らく今後も変わることは厳しいだろう。

学生たちは、初めて中学校の「授業づくり」に向かう。その出発点で、「学び」の本質である「学び」の楽しさ、深さを体感できる授業にしたいと思っている。そのため指導法Ⅲでは、理科教育の基礎基本を、指導法Ⅳでは様々な子どもに対応した指導法や学習デザイン力をグループ討論・直接経験等を通して培っている。また、こうした様々な体験から創出される新しい教材や指導法は勿論、それに至る過程そのものが、学生たちの未来を切り拓く力になっていくと確信している。

これまでの理科指導法Ⅲの内容から特徴的な学習を紹介したい。一つは、教育や自然科学に対し個々の学生が抱いている自己課題を発表しあう時間(10~20分程度)の導入である。紙面の都合で発表内容等については割愛するが、写真-1は「読書の効果」について追究してきた学生のプレゼン風景である。こうすることで、授業の基礎的スキルや学生間の相互理解を得ることが可能となっている。

二つに体験的な「学び」の導入である。冒頭の図にも示したが、授業を構成する要素の一つに「教材」がある。参考書や指導書丸写しの授業が子どもの知的好奇心を喚起することはない。指導者自身が体験し感動したものが言葉や表情に乗って子どもの心の深くに届く。写真-2は子どもが課題意識を持つために用いるストロー笛等の製作、写真-3は南アルプスジオ・アートの活用についての協議の様子である。また、写真-4は、大学構内で野外の観察指導と身近な植物の教材化について学びあう風景である。繰り返しになるが、こういった体験的・協働的な「学び」の原体験が、新しい教育の指導者になるための第一歩になるだろうと思う。

恐らく学内の各授業では、多かれ少なかれこのようなことは実践されており、取り立てて主張すべき内容ではないだろう。自分自身への戒めとして、再度授業運営を振り返ってみたものである。

教師はどのように授業を創るか？

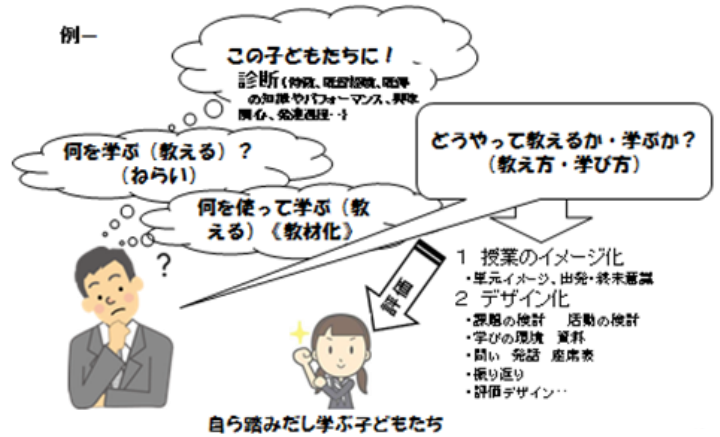


写真-1



写真-2

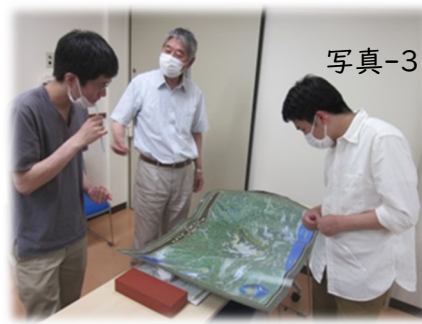


写真-3



写真-4

地域連携パートナーからのメッセージ



【子どもたちの夢を育む「やまがた未来塾」】

子どもたちの「わかった。できた。」を実感できる学びの場であり、将来の夢を育ていける場になることを願って、「やまがた未来塾」を開催しています。

「やまがた未来塾」は、昨年(2021年)5月に開塾し、本年も前年度と同様の運営内容で開催されています。毎月2回土曜日に開催し、本年度は全19回の開催を予定しています。午前中は、小学校児童が休憩時間に工作を入れながら2時間の学習をし、午後は、中学生が3時間自学・自習に取り組んでいます。児童、生徒の学びを支える学習支援員は、教員の退職者等4名と学生5名が参加をしています。

「やまがた未来塾」で特徴的なことは、「安全な学校給食を守る会未来塾部会」の皆さんが、低額(小中学生100円・大人300円)で、質・量ともに大満足の昼食を毎回手作りで用意してくれることです。手間のかかる多品目の料理の提供に感謝するとともに、感謝の気持ちでいっぱいです。

未来塾に参加する学生の皆さんは、初めのうちは子どもたちとコミュニケーションをとることが難しく、なかなか積極的に声をかけることができませんでしたが、回を重ねるごとに児童、生徒との関係性が築かれ、学習内容だけではなく、日々の生活などの話しもできるようになってきました。子どもたちにとって、自分と年齢が近い学生は、あこがれの人であり相談しやすい存在であると思います。また、学生の皆さんも、子どもたちから刺激を受けながら、子どもたちの積極性や興味関心を育てていこうと、子どもたちと真剣に向き合ってくれています。

一方、学生の中には、学習支援という立場から、未来塾での学びの在り方について課題と考えている内容もあると思いますので、学生の皆さんと相談しながら改善をしていきたいと考えています。



「やまがた未来塾」では、学生の皆さんの支援を受けながら、子どもたちが「わかった。できた。」を積み重ね、自己肯定感を高めていってほしいと願っています。また、学生の皆さんと関わることによって、将来の自分の姿を夢みたり、今後の生き方を考える機会になればと思っています。「やまがた未来塾」が、学習面だけではなくキャリア教育にもつながる場であり、子どもたちにとって夢や希望が描ける居心地の良い場所であるよう、学生の皆さんと一緒に「やまがた未来塾」の運営を考えていきたいと思っています。

(山形村教育委員会)

編集後記

まだまだコロナウイルスに関して予断を許さない状況が続いています。しかし、こうしたなかでも感染対策を万全にして地域連携に出かけている学生は多く、しっかりと実践経験を積んでいる姿を頼もしく思います。地域連携パートナーの皆様からもらったかいお声をいただき、県内のあちこちでよい交流の循環が生じていることが実感されます。(広報担当 河野桃子)

